

アングロサクソン期の法文書から見る 中世イングランドにおけるキリスト教化

—カヌート王の法文書による—考察

和田 忍

1. はじめに

西暦 1000 年頃はイングランドにおいて後期古英語の言語によりいくつかの著名な作品が残され、当時のイングランド社会・文化の形成に多大な貢献をしている。例えば、聖書 (the Bible) および説教集 (homilies) を題材とするラテン語原典からの古英語への翻訳作品は俗人に対してキリスト教信仰の定着を促すメッセージとして大いに役立ったと考えられる¹。そして、キリスト教を根付かせることに関して言えば、それ以外の古英語作品も関与の度合いが大きいはずである。そのうちの一つとして挙げられるのが、イングランドの政治的歴史を主に扱っている文書である法文書 (Law-code) である。この法文書はアングロサクソン時代の歴代の王たちが一般国民のために国家の規律を示した法律だけでなく、王と教会の関係性、教会関係者の権利を守るための法律といった内容について述べられている。そして、キリスト教化に強く関わりを有する法文書として、カヌート (Cnut, 985 または 995-1035) 王の法文書がある。カヌート王とはノルウェー王であり、デンマークの王も兼ねていたスヴェイン (Swein) 王の第 2 子であったが、1017 年にそれらの国々とともにイングランドも王として支配していた人物である。彼の時代はヴァイキングの侵略の影響によりブリテン島が依然として混乱していた²。またこの時期はヴァイキングとしてスカンジナビアから渡来した北方の人々 (この時期は主にデンマークからのデーン人であるため、以

1 当時の王と教会との関連性については M. K. Lawson, *Cnut: The Dane in England in the early eleventh century* (New York: Longman, 1993), pp. 56-57 を参照。

2 当時のイングランドにおけるヴァイキングによる侵略の証拠等は Simon Keynes, 'The Vikings in England', c.790-1016, in *The Oxford illustrated History of The Vikings*, ed. by Peter Sawyer, (Oxford: Oxford University Press, 1997) pp. 74-75 や *The Anglo-Saxon Chronicle in English Historical Document c. 500-1042, vol. 1*, ed. by Dorothy Whitelock (London: Eyre Methuen, 1979), pp. 236-38 を参照。

下はデーン人とする。)がイングランドのアングロサクソン人と徐々に同化していく過程でもあった。カヌート王は元々イングランドに住みついていたアングロサクソン人と後からイングランドへやってきたデーン人とをうまく同化させるためにそれら2つのグループに対してそれぞれ異なる法律を制定した。その同化政策のポイントとなったのは信心深いカヌート王によるキリスト教の更なる布教、定着であった。そこで、本稿ではキリスト教化を促したカヌート王とその作成に関与していたとされるヨーク大司教(Archbishop of York)のウルフスタン(Wulfstan)の残した法的資料からこの時代のキリスト教化の一面を探ってみたい。

2. カヌート王の法文書

カヌート王の法文書は2つの内容で構成されている。ひとつは教会関係の内容で、もうひとつは非宗教的な(世俗的)内容である³。(それぞれ *I Cnut*, *II Cnut* と表記される。)この法文書の作成時期についてははっきりしていない。おそらく1020年頃とされている(他にも1029年頃とする説もある。)が、カヌート王は1019年に故郷であるデンマークへ向かい、同年の冬を故郷で過ごした。その後、イングランドへ帰還した時期に触れている書物が存在しないため、法文書の作成時期が判明しないのである。ロバートソン(Robertson, 1925, p. 42)によると、イングランドへ帰還してすぐの1020年にサイレンセスター(Cirencester)にてカヌート王は最初の発布を行ったと考えられている⁴。一方で、ウォーモルド(Wormald, 1999, pp. 345-46)は、1020年におけるカヌート王自身の書簡をもとに考察すると、王は1020年または1021年のクリスマスにウィンチェスター(Winchester)にて法を定めたとの見解を示している⁵。いずれにせよ、1020年もしくはその翌年頃の作成と考えるのがよいであろう。そして、カヌート王の法文書は歴代のアングロサクソン時代の王による法文書の中で最も分量が多いが、その大半はカヌート王以前の王たちによって作成された法律の抜

3 *English Historical Document c. 500-1042*, vol.1, p. 454 と Lawson, p. 61 を参照。

4 *The Laws of the Kings of England: From Edmund to Henry I*, ed. and trans. by A. J. Robertson (Cambridge: Cambridge University Press, 1925) p. 42 を参照。

5 Patrick Wormald, *The Making of English Law: King Alfred to the Twelfth Century*, vol.1 (Oxford: Blackwell, 1999) pp. 345-46 を参照。

粹を用いている。このカヌート王の法文書の特徴としては説教的な内容が含まれていることであるが、それに携わったのが前述のウルフスタンである。

3. ヨーク大司教ウルフスタン

ウルフスタンはウスター（Worcester）で司教を務めた後、ヨークにて大司教となったが、アゼルレッド2世（Aethelred II）およびカヌートの2代にわたってアングロサクソン王の諮問役としても活躍した⁶。また、当時最も著名な説教作者でもあり、多くの著作を残している。カヌート王の法文書（「第一法典」*I Cnut*、「第二法典」*II Cnut*ともに）に関してはウルフスタンが作成責任者であったと言われている。この中で、ウルフスタンは当然ながら主に教会関係問題について記述しているが、これまでのウェストサクソンの王たちが作成してきた法律を再構成しようとも試みていた。そして、ウルフスタンはカヌート王の下で責任のある地位を占めているという理由から、カヌート王の考えに矛盾しないように心掛けていたようである。法文書というある程度きまりきった形式や表現が多いが、ウルフスタンが関わった注文書の中には彼の説法者らしい表現を感じさせる部分がある⁷。これは当時のまだヴァイキング侵略の影響による混乱期にあった中でキリスト教の価値観を少しでも表現しようとしていたことを示しているともいえる。

4. カヌート王の法文書によるイングランドのキリスト教化

イングランド王として認められる以前、カヌート王が自らヴァイキングとしてイングランドを侵略、略奪した頃はキリスト教徒ではなく、ゲルマン民族の有する神話に基づくゲルマン的異教を信仰していた⁸。そして、イングランドの王座に就いてすぐ洗礼を受け、イングランド王となってからは聖職者に対して寛容な

6 R. D. Fulk and Christopher M. Cain, *A History of Old English Literature* (Oxford: Blackwell, 2003) pp. 24-25 を参照。

7 Stanley B. Greenfield and Daniel G. Calder, *A New Critical History of Old English Literature* (New York: New York University Press, 1986) p. 110 を参照。

8 Jesch, Judith, 'Scandinavians and "Cultural Paganism"', in *The Christian tradition in Anglo-Saxon England: Approaches to Current Scholarship and Teaching*, ed. by Paul Cavill (Cambridge: D. S. Brewer, 2004), pp. 57-58 を参照。

心を持っていたと考えられている。またその結果、カヌート王はイングランド地域において彼の支配以前にすでに確立していた教会の財産についてはそのままの状態での維持を所有者である聖職者たちに確約している⁹。ここで、まず 1020 年のカヌート王の布告（前段のカヌート王によるイングランド国民への書簡）の一部を考察する¹⁰。

1. カヌート王はイングランドにおける我が大司教及び大司教補佐、豪族のソルケルまたすべての豪族、そして自由民、司祭、平信徒といったすべての人々に対して心からの挨拶をする。
2. そして、私は信仰深い領主であり、神の正しい法律に対して背信しないことを誓う。

（以上、試訳）

この書簡は豪族であるソルケルの指示で示される法律に背く人々に対して書かれたものである。以上に挙げた 2 文はカヌート王の挨拶から始まり、次に教会の権利と世俗の法律について述べられている。まず教会の権利について述べているということからもカヌート王がキリスト教の信仰を重要視していたということがわかる。キリスト教を通じて国家を治めるという態度は、カヌート王以前のアングロサクソンの歴代の王たちについても当てはまる。むしろ、歴代のイングランド王のようにカヌート王もキリスト教を通じて国家を支配することの必要性に迫られてキリスト教徒となり、キリスト教の影響力を思い知ったと考えられる。また、外国人としてイングランドを支配するにあたって、歴代の王のやり方に合わせるということを自ら望んでいたとも考えられる。そして、この書簡の作成にはウルフスタンが関わっていることから、それ故、以降発布されるカヌート王の法文書に関してもウルフスタンの文章表現法が色濃く示されることとなる。

次にカヌートの第一法典（*I Cnut*）の聖職者に関する法律に関して、カヌー

9 Stenton, F. M. *Anglo-Saxon England*, 3rd edn. (Oxford: Clarendon Press, 1971) p. 409 を参照。

10 以後の例文は *The Laws of the Kings of England: From Edmund to Henry I*, pp. 140-219 と *English Historical Document c. 500-1042*, pp. 452-78 による。特に後半の法律については大沢一雄、『アングロ・サクソン（＝古英）法典』（東京、朝日出版社、2010 年）から引用。

ト王がキリスト教の力をうまく利用して、イングランドでの支配に結びつけたと思われる部分の例を挙げる。

第1条

それは、先ず第一に、彼らは、他のいかなるものにも増して一神のみを愛し、かつ、たたえ、キリスト教という一宗教のみを全員一致して信仰し、また、王カヌートを真に忠実な心で愛さなくてはならないということである。

(大沢一雄、2010年、449ページの該当箇所より抜粋)

この文章ではイングランド国民は神であるキリストとともに王であるカヌートにも尽くすことを求めている。この表現はカヌート王の前王であるエゼルレッド王でも用いられている。これはエゼルレッド王にも仕えていたウルフスタンがカヌート王の法文書においてもエゼルレッド王の法文書同様の表現を利用したと考えられる¹¹。おそらく、カヌート王もこれまでのアングロサクソンイングランドの伝統を引き継ぐことができ、かつイングランド地域の人々の掌握のために必要な、そして重要な概念として、神と自身とを同列に敬わせる表現を好んでいたのではないだろうか。また、この文章にはそれまでにイングランドに住みついているアングロサクソン人と後から侵入したデーン人との良好な関係を保ちながら支配できると考える意図も含んでいるように見受けられる。キリスト教徒でないヴァイキングは無慈悲にイングランドを荒廃させた。先住のアングロサクソン人がキリスト教に従っているようにキリスト教徒でないデーン人にキリスト教への信仰を促せば、王はキリスト教を通じて国家統一が望める。宗教という媒体をうまく利用して、国家の統一を図ることはこれまでのアングロサクソン王たちも行ってきた。カヌート王もそれに乗じ、さらに時代の状況に合わせた形でキリスト教化を進めたのである。

カヌートの第二法典 (*II Cnut*) は教会関係者でない世俗の人々に対する法律であるが、この法律の対象者は2つの民族であり、先住のアングロサクソン人と

11 *The Laws of the Kings of England: From Edmund to Henry I*, p. 348 を参照。

後に移住してきたデーン人である。またそれはすなわち、キリスト教徒と非キリスト教徒に対しての法律である。ここでは非キリスト教徒に対する法律の一例を挙げる。

第 5 条 異教信仰

余はすべての異教信仰を厳重に禁止する。

1. 異教信仰とは、偶像、異教の神、および太陽または月、火または洪水、泉、または石または何らかの種類の森の木々を崇拜し、または魔法を好み、または何らかの方法で人の死を招くことを促進し、または犠牲もしくは恐怖によって、またはその種の幻想によって何事かをおこなうことである。

(大沢一雄、2010 年、473 ページの該当箇所より抜粋)

この部分はイングランド国民に対して、異教的行為を禁ずることを示しているが、この文章における対象者は明らかに後からイングランドへ侵入してきたデーン人であり、先住のアングロサクソン人でない。また、具体的に違法な行為を示しているので、アングロサクソン人に対しても異教徒は悪であるという警戒心を強めさせる効果もあったかもしれない。この表現はイングランドに定住して同化したと考えているデーン人のキリスト教化に対して、大きな効果があったと考えられる。そして、これはウルフスタンのキリスト教を根付かせるための知恵が含まれているともいえる。

さらに、カヌートの第二法典（II Cnut）からデーン法施行地域（the Danelaw）についての法律の例を挙げる。

第 15 条

また、デーン法施行地域においても、王は、私闘、兵役の忌避、平和の紊乱および住居侵入に対する罰金を徴収する権限を持つものとする。ただし、王が何人かに対して格別の恩恵として罰金の徴収権をあたえることを望むときはこの限りでない。

(大沢一雄、2010 年、478 ページの該当箇所より抜粋)

第 48 条 何人かが教会諸税の納入を拒否した場合

何人も、暴力に訴えて教会諸税の納入を拒否したときは、デーン法施行地域においてはデーン法による罰金を、イギリス法施行地域においては満額の罰金を支払わなければならない。または 11 名の免責宣誓者を選び、その者自身を 12 番目の宣誓者とする宣誓によって身の証を立てなければならない。

(大沢一雄、2010 年、499 ページの該当箇所より抜粋)

上記の「デーン法施行地域」とは、9 世紀後半に活躍したウェセックス (Wessex) のアルフレッド大王 (Alfred the Great) とデーン人の首領グズルム (Guthrum) との間で 878 年に交わされた「ウェドモア条約」(Treaty of Wedmore) によって定められたおおよそイングランド北部および東部にあたる地域であり、この広大な地域がデーン人に割譲された。もちろん、デーン法施行地域においてもカヌート王は強大な権力を握っており、この地域に対してもキリスト教の力を用いた支配を行っていることがわかる。この時代にイングランド地域における多数派を占めていたアングロサクソン人もゲルマン民族であり、ノルウェー人および、デーン人と起源は同じである。そうした意味でもデーン人のイングランドにおけるイングランド人との同化は容易だったのかもしれない。そして、その同化の鍵となったのが、「イングランドにおける外国人 (デーン人) のキリスト教化」であり、実際、イングランドへ移住したデーン人はキリスト教に従い、イングランド人として同化した。

5. おわりに

カヌート王の治世のイングランドはそれまでに住みついていたアングロサクソン人はすでにキリスト教徒であったが、後から移住してきたスカンジナビアの人々やデーン人は全員がキリスト教とは言えない状態であった。そのような状況において、カヌート王の顧問であったウルフスタンはイングランドにいるキリスト教徒を再教育するとともに新しくイングランドへやってきた人々のキリスト教化を法律面からも図った。ウルフスタンのキリスト教化の思考はカヌート王と一致するところで、カヌート王の意向も強く表されているように思われる。キリス

ト教により、異なる人々を一つにし、その結果国をも支配することが可能となった。キリスト教という宗教が政治において重要な役割を果たしたことを示すカヌート王の時代は中世イングランド期におけるキリスト教化の側面を探る観点からしても興味深い時代である。